〔駒沢女子大学　研究紀要　第３号　P. 45～58　1996〕

ヴォルテール思想における自然と神性について
――『エウヘメロスの対話』研究Ⅰ：第１、第２の対話――

栩木　泰

Les Idées Voltairiennes de la Nature et de la Divinité
――Etude sur les *Dialogues d'Evêmère,* les Premier et Second Dialogues――

Yasushi TOCHIGI

Les derniers que Voltaire ait écrits, parus en brochure en 1777,imprimés à Amsterdam sous la fausse adresse de Londres, *Dialogues d'Evêmère* constituent le testament métaphysique de Voltaire vue de la date de parution autant que l'étendue et la densité du sujet.

Le but de cette étude est de présenter et résumer les idées voltairiennes de la nature et de la divinité en même temps de traduire en japonais le premier dialogue sur Alexandre et le second sur la Divinité en faisant les commentaires du texte.

はじめに

『エウヘメロスの対話（*Dialogues d'Evêmère*）』は、31編あるヴォルテールの「対話」の最後を飾るだけでなく、最晩年の1777年に発表されていることから、ヴォルテール最後の著作と考えられる。1777年、すなわち死の前年にアムステルダムにおいて仮綴本のかたちで刊行され、発行元は匿名、ロンドンの架空住所になっていた。

その後、1778年に『現代の福音（*l'Evangile du jour*）』の第15巻に取り入れられたあと、1780年にポット版ヴォルテール全集（Lausanne, J.H.Pott）第53巻に収録された。1826年、ボードゥアン兄弟による全集（Baudouin Frères, Editeur à Paris）第50巻「対話Ⅱ」として刊行されたあとは、なぜか全集から除外されてきた。ようやく近年、オックスフォードのヴォルテール財団（Voltaire Foundation, University of Oxford）から刊行されつつある全集に顔を出すことになった。

本稿は、ヴォルテール生誕300年を記念して1994年11月、カンヌヴァ社から出版された、ジョルジュ・プファン（Georges Pfund）の序文のついた『エウヘメロスの対話』（Frasne, Canevas Editeur）（以下、ＣＥと略記）を基にしている。これは、ボードゥアン兄弟版全集（以下、ＢＦと略記）から注もろとも忠実に再録したものである(1)。

本書の内容は、アレクサンドロス大王（前356－323）の東方遠征に随行したギリシアの哲学者エウヘメロス（Evhémère）(2) が友人カリクラテス（Callicrate）を対話相手として、世界の成り立ち、エピクロスの物理学からプラトンの形而上学まで、さらに諸蛮族の社会で発見した重要な事柄について、12のテーマに分けて語るというものである。

主役エウヘメロスはシュラクサイ出身の実在の哲学者をモデルにしていると見てまちがいない。ヴォルテールは第１部の原注において、「エウヘメロスはアレクサンドロス時代に存在したシュラクサイの哲学者であり、ピュタゴラス派やゾロアスター派と同じくらい多くの旅をした。著作はほとんどなく、彼の書いたもの

とされるのはこの小品だけしかない」としている。[3] 実際にはこのエウヘメロスは、紀元前4世紀ないし3世紀、シチリア島メッサナもしくはペロポンネソスのメッシナに生まれ、マケドニア国王カサンドロス(前316－297）に仕えた神話学者であり、『神論（*Hiera Anagraphe*)』の著者である。

「大部分は消失しているが、この書の中で著者は、偉大なる神々（ウラノス、クロノス、ゼウス）を、死後に栄誉を与えられ、神格化された慈悲深い王たちとしている。エウヘメリスム（évhémérisme）として知られる、神々の起源に関するこの合理主義的説明は、異教信仰に対抗するキリスト教会によって利用されたが、啓蒙思想家、とくにヴォルテールの関心を引き、彼はこの説を難なく自分の理神論に結びつけた」[4]。このエウヘメリスムは、「人間が神になるという誤った表現を非難し、宗教における神話の役割を強調する。啓蒙思想家たちははたと膝を打ち、エウヘメロスを自由思想の代弁者と見なした」[5] のである。

しかし、エウヘメロスはあくまでモデルであって、史実に基づいた物語の主役ではない。それどころか、この「対話」では、エウヘメロスはヴォルテールの同時代の人物や事象についてコメントするという、ＳＦ並みのタイムスリップが見られる。著者はこの壮大な「形而上学的遺書(testament métaphysique)」において時間と空間を自在に駆け巡るのである。

対話の相手であるカリクラテスとはだれか。これについて、1826年のボドゥアン兄弟版（ＢＦ）の編者は次のような注を付している。「アレクサンドロスあるいはエウヘメロスの同時代人にカリクラテスという名は見当たらないが、コルネリウス・ネポス(Cornelius Nepos)[6]がカリクラテスと名づけたカリップス(Callippus）という人物がいる。このカリップス＝カリクラテスはアレクサンドロスが生まれた4年後ないし5年後に死亡しており、ヴォルテールがエウヘメロスに対話相手として与えた人物である可能性がきわめて高いと思われる。紀元前351年以後に死去したカリップスはプラトンに師事したことがあり、シュラクサイを占領し、カタニアを攻囲した。そのため、本書の「第2の対話」の中で、カリップス＝カリクラテスはプラトンの教えについて語り、シュラクサイやカタニアといった都市にも言及している。しかも、すでに別の機会に指摘したことであるが、エウヘメロス＝ヴォルテールは、この対話の中では時代についての正確さ、真実らしさに関してはもはや頓着しないと、また、本書以前に書いた大部分の対話においてもこの点を気にかけなかったと言っている。このようなごくごく半透明の隠れ蓑をかぶって、ヴォルテールの第31作目にして最後の対話となった本書の中で、エウヘメロスとカリクラテスは、マルブランシュ（Malebranche)[7] やライプニッツ（Leibnitz)[8] やオルバック男爵（Baron d'Holbach)[9] の学説について、さらにはジャン＝ジャック・ルソー（Jean-Jacques Rousseau）の『サヴォア人助任司祭の信仰告白（*Profession de foi du vicaire saboyard*)』についてまでも、論じ合うのである」[10]。

いずれにしても、この2人の対話者、エウヘメロスとカリクラテスは「じつはヴォルテールの2つの顔である。2人は理性と創造的想像力とで武装して、真実を求めて対話を行なう」[11] のである。

本稿は、『エウヘメロスの対話』のうち第1と第2の対話を邦訳し、注釈を加えるとともに、自然と神の存在に関するヴォルテールの思想を、他の著作や研究者の論評を引用しながら要約するものである。

〈注〉

（1）Voltaire, *Dialogues d'Evêmère* 1777, avec un préambule de Georges Pfund.
Cette edition des douze dialogues d'Evêmère reprend fidèlement la version publiée dans les *Œuvres Completès de Voltaire avec des remarques & des notes historiques, scientifiques & littêraires,* Dialogues Tome II, Volume 50, Baudouin Frères, Editeurs à Paris, Deuxième Edition 1826.

（2）原書テキスト（ＣＥ）ではEvêmèreという表記で統一されているが、ジョルジュ・プファンによれば、ジュネーヴの「逸楽館（Délices)」のヴォルテール研究所に所蔵されている手書き原稿を見ると、Evhémère、Ephémèreとも表記されている。Georges Pfund, "Un guise de préambule" CE, p.9.

（3）Notes du Premier Dialogue 2, CE, p.20.

（4）Jean Mayer, "Dialogues d'Evhémère (1777)", *Dictionnaire Voltaire*, Hachette,1994, p.51.

(5) Stéphane Pujol, “Dialogues d'Evhémère”, *Inventaire Voltaire,* Editions Gallimard, 1995, p.407.
(6) ローマの伝記作者（前99頃－24)。『外国名将伝（*De exellentibus ducibus exterar um gentium*)』の著者。
(7) フランスの哲学者（1638-1715)。
(8) ドイツの哲学者・数学者（1646-1716)。
(9) フランスの哲学者（1723-1789)。
(10) Notes du Premier Dialogue. CE, p.20.
(11) Georges Pfund, “Un guise de préambule” CE, p.9.

エウヘメロスの対話
Dialogues d'Evêmère
第１の対話　アレクサンドロスについて
Premier Dialogue:Sur Alexandre

全12の対話[1]において、カリクラテスが提起する形而上学的問題に関する質問にエウヘメロスが答える構成になっている。本書の冒頭、「第１の対話」では、エウヘメロスがアレクサンドロス大王の東方遠征に随行して目にした事実から、大王の、とくに迷信に発する蛮行を非難し、英雄の台座から引き摺り下ろす。カリクラテスは、偉大なる征服者の人間としての矮小さ、卑劣さを示すいくつかの事例を聞いておどろきながら、最後に本書12章のテーマとなる大きな形而上学的疑問を提示し、エウヘメロスに説明を促すところで終わっている。明らかに、本書の導入部の役割を果たしており、それ以上でも以下でもない。

〈本文試訳〉
カリクラテス
さて、賢人エウヘメロスにうかがうとしよう。このたびの旅行でなにを見てこられたかな？
エウヘメロス
くだらんことをいろいろとさ。
カリクラテス
なんと言われる！　きみはアレクサンドロスに従って旅をしてきたのではないか。それでいささかも崇敬の念に打たれていないとでも？
エウヘメロス
むしろ憐憫の情と言ってもらいたいね。
カリクラテス
アレクサンドロスに憐みを？
エウヘメロス
ほかにだれを憐れめというのかね？　もっとも、彼の姿を見たのはインドとバビロンだけだがね。よせばいいのに、このわたしも、勉学のためにむなしい期待をいだいて馳せ参じたわけだ。じっさい、彼は英雄として遠征に出発したそうだが、帰ってきたときはただの愚か者だったよ。だれよりも人間的なギリシア人だったあの神のごとき英雄が、だれよりも残忍な野蛮人になっていたのだ。アリストテレスのまじめな弟子がなさけない酔っ払いになりはてていた。わたしが彼のもとに着いたとき、ちょうど食事の席を立つところだった彼は、壮麗なるエステカル神殿に火を放つことを思いついた。それというのも、タイスと称するあわれな放蕩者の気まぐれを満足させるためにだ。わたしは彼がインドでさんざん愚かな行為を繰り返すのを見せつけられたが、バビロンで部下の最低のぐうたら兵士同様にのんだくれたあげくにあたら若い命を散らすのを、この目でしかと見届けたしだいさ。

カリクラテス

矮小なる大人物というわけか。

エウヘメロス

ほかにはまずいまいね。わたしが発見した磁石の特性みたいに、一方の端では引きつけるが、もう片方では跳ね返す。

カリクラテス

酔っ払って街に火をつけたとなると、わたしもアレクサンドロスには猛烈に反発を感じるな。しかし、きみの言うエステカルというのは初耳だ。わたしが知ってるのは、そのおっそろしい気の狂ったタイスがおもしろがってペルセポリスを焼き払ったことだけだ。

エウヘメロス

エステカルはまさしくそのギリシア人がペルセポリスと呼ぶ町のことだよ。われわれギリシア人は世界中をギリシア風に仕立てたがるんでね。ゾンボドポという川にインダスと命名したし、別の川[2]にヒュダスペスという名をつけた。アレクサンドロスに攻囲されたか占領された町で、元の本当の名で呼ばれている町は一つとしてない。インドという名前にしてからが連中の発明で、東洋諸国ではオドゥーと呼んでいたのだ。そんな具合にエジプトでヘリオポリスだの、クロコディポリスだの、メンフィスだのという町ができたわけさ。連中ときたら、語呂のいい名を見つけさえすりゃ、ご機嫌でね。神や人間にもそうやって名前をつけて世界中をだましたんだな。

カリクラテス

それほど悪いことじゃあるまい。わたしは、そんなことで世界をだました連中に文句を言うつもりはないね。文句を言いたいのは、世界を荒らし回るやつらにだよ。おたくのアレクサンドロスにはがまんがならん。ギリシアを出発してキリキア、エジプトを通ってコーカサス山中に行き、そこからガンジス川くんだりまで足を伸ばして、敵だろうが味方だろうが赤の他人だろうが、手当たりしだい殺しまくる始末だ。

エウヘメロス

仕返しをしただけさ。彼がペルシア人を殺しに出かけたのは、ペルシア人が昔、ギリシア人を殺しに来たからだし、コーカサス山中のスキタイ人の住む広大な地方まで行ったのは、そのスキタイ人が二度までもギリシアとアジアを略奪したことがあるからだ。昔から、どこの国民もお互いに盗んだり盗まれたり、縛ったり縛られたり、皆殺しにしたりされたりしてきたんだ。兵隊というのは要するに泥棒のことだよ。それぞれの民族が自分の神の名において盗みをするために近隣民族に襲いかかる。今だって、われわれは隣国のローマ人が、ウォルスキ人[3]、アンティアテス人[4]、サムニウム人[5]から略奪するために、すみかとする七つの丘を出発するところを目にしているではないか。そのうち、彼らが船を作れるようになったら、われわれギリシア人をさえ襲いにやってくるだろう。彼らは近隣都市ヴェイイ[6]の穀倉に小麦と大麦が少しあると知るや、ヴェイイ人を略奪しに行くのは正しいと、外務神官[7]に宣言させるのだ。この略奪行為が聖戦となるわけだ。ローマ人は殺戮や略奪を命ずる神託を与えられていることになる。ヴェイイ人のほうにも、ローマ人の藁を略奪してよいとする神託があるんだ。アレクサンドロスの後継者たちは、かつて親分のために略奪した属州を、今、自分のために略奪しているんだ。人間というのは、昔もそうだったし、今もそうだし、将来も変わらないだろうな。わたしは地球の半分を見て回ったが、目にしたものといえば、愚行と不幸と犯罪だけだったよ。

カリクラテス

多数の民族の中には一つぐらい立派な民族が見つかっただろう？

エウヘメロス

皆無だね。

カリクラテス

それではうかがうが、いちばん愚かで、いちばん悪いのはどの民族だい？

エウヘメロス

いちばん迷信深いやつらさ。

カリクラテス

どうして、いちばん迷信深いのがいちばん悪いんだ？

エウヘメロス

迷信深い人間は、他人が習慣によって、あるいは狂気の発作によってやってしまうことを、義務感からやろうとするんだ。ギリシア人でも、ローマ人でも、スキタイ人でも、ペルシア人でも、ふつうの蛮族は、さんざん殺し、盗み、自分が殺したばかりの人間の酒を飲み、父親の喉をかっ切ってその家の娘たちを手ごめにし、もうなにも要らなくなると、疲れを癒すためにしずかになり、人間的な態度をとるようになるものだ。自然が人間の心の奥底にしまっておいた憐憫の声に耳を傾けるわけだ。ひとたび空腹が癒されたら、もはや獲物を追いかけることをしないライオンみたいにな。ところが、迷信深い人間は、満腹した後でさえ、獲物を殺し肉を引き裂く虎なのだ。プルトン(8)の秘儀祭司がプルトンにこう言ったことがある。「メルクリウス(9)の崇拝者どもを皆殺しにせよ、家をことごとく焼き払え、動物をすべて屠れ」と。わたしの崇拝者は、メルクリウスの領土で子供や犬を生かしておけば瀆聖の行為と考えるだろう。

カリクラテス

おどろいたな！　この地上にそんな忌まわしい民族がいるとは。で、アレクサンドロスはそういう民族を根絶やしにしないで、平和で人間味に富み、それから、哲学を発明したと言われている人びとに襲いかかるためにガンジスくんだりまで出かけたのか？

エウヘメロス

そういうわけじゃない。彼は、今わたしが話した狂信的な蛮族の小集団の一つのそばを矢のように通り過ぎただけなんだ。狂信には卑屈と怯懦がつきものだから、そのみじめな連中はアレクサンドロスに許しを乞い、おべっかを使ったあげく、自分たちが奪った黄金の一部を献上して、その後も引き続き黄金を盗むことを認めてもらったのだ。

カリクラテス

人間とはげにおそろしき種なりということか？

エウヘメロス

数の多いこの動物の中には羊もいないではないが、大部分は狼と狐さ。

カリクラテス

同じ種の中にどうしてこれほど大きな違いがあるのか、知りたいものだね。

エウヘメロス

狐や狼が小羊を食べちまうからだそうだ。

カリクラテス

いや、この世界はあまりにも悲惨で、あまりにもおぞましいではないか。わたしが知りたいのは、どうしてこれほど災厄が起こり、愚行が行なわれるか、だよ。

エウヘメロス

それはわたしも同じだ。ずいぶん以前のことだが、わたしはシュラクサイで自分の畑を耕しながら(10)、そればかり考えたものだよ。

カリクラテス

ほう、きみはどんなことを考えたんだい？　どうか、次のような疑問に手短に答えてもらいたい。この地球にはずっと昔から人間が住んでいたのか。そもそもこの地球自体が昔から存在していたのか。われわれは霊魂をもっているのか。その霊魂は、言われているように、不滅なのか。神は唯一なのか、それとも多数の神がいるのか。神々はなにをつくったのか、どんな役に立つのか。徳とはなにか。秩序と無秩序とはなにか。自然とはなにか。自然は法をもつのか。その法をつくったのはだれか。社会や芸術を発明したのはだれか。

最良の政府とはどのようなものか。とくにききたいのは、人間一人ひとりが絶えず囲まれている危険を逃れるための最良の秘訣はどんなことかだ。その他のことは、いずれ別の機会に検討することにしよう。

エウヘメロス

毎日10時間話をしたとしても、少なくとも10年はかかるだろうよ。

カリクラテス

しかし、こういう問題について、昨日、美しきエウドクソス(11)の家でシュラクサイのじつに好感のもてる人たちがさんざん論じたんだ。

エウヘメロス

それで、どんな結論が出たのかね？

カリクラテス

なにも出やしなかったさ。その場に供儀祭司が2人いてね。1人はケレス(12)の祭司、もう1人はユノ(13)の祭司で、しまいには罵り合いになっちまった。さあ、きみが考えていることを遠慮なく話してくれないか。けっしてきみを殴ったり、ケレスの供儀祭司に告発したりしないと、約束するよ。

エウヘメロス

それじゃ、明日、聞きにきてくれたら、なんとかお答えするように努めよう。ただし、きみを満足させると約束はできないがね。

〈注〉

（1）全12の対話の標題は次のとおりである。

第1の対話　アレクサンドロスについて
第2の対話　神性について
第3の対話　エピクロスの哲学とギリシアの神学について
第4の対話　もしも行動する神が、なにもしないエピクロスの神々に優るものではないとしたら
第5の対話　奈落の淵を掘るあわれな者。動物種の全行動の原理である本能。
第6の対話　プラトンやアリストテレスは神について、世界の形成について、われわれに教えてくれたか。
第7の対話　蛮族の中で花咲いた哲学者たちについて
第8の対話　蛮族の哲学者の偉大なる発明；彼らに比べたら、ギリシア人などは子供みたいなもの
第9の対話　生殖について
第10の対話　もしも地球が彗星によってつくられたとしたら
第11の対話　もしも山が海によってつくられたとしたら
第12の対話　蛮族の発明品、新しい技術、新しい思想

（2）現在、ジェールム川と呼ばれる、ヒマラヤ山中に発し、カシミールからバングラデシュに流れる川。

（3）イタリアのルティウム地方に定住した古代民族。紀元前4世紀中頃、ローマに征服された。

（4）不明。

（5）イタリア中部山岳地方に定住した古代民族。

（6）古代エトルリアの都市。紀元前5世紀から同4世紀末にかけてローマの将軍カミルスによって占領された。

（7）宣戦布告に際し、特別な聖儀を司った古代ローマの聖職者集団。

（8）ギリシア神話の冥府の神。

（9）ローマ神話の商人の守護神。神々の使者。

(10)「自分の畑を耕し…」(Il faut cultiver notre jardin.)、すなわち、ヴォルテールの小説『カンディード(*Candide*)』をしめくくる有名な言葉がここで使用されている。エウヘメロスがヴォルテール、それ

も「フェルネーの長老（Patriarche de Ferney）」時代の彼を代表していると考える根拠とも言える。

(11) 原文はla Belleという女性形容詞がついている。同名のギリシア人に高名な数学者・天文学者（前408頃－355）がいるが、こちらはクニドスの出身で、シュラクサイに住んだという記録はない。

(12) ローマ神話の豊饒の女神。

(13) ローマ神話の最高女神。ユピテルの妻。

第2の対話　神性について

Second Dialogue：Sur La Divinité

この「形而上学的遺書」の第2の対話において、ヴォルテールの多数の著作に出てくる神の存在証明に関する議論が集約されている。ヴォルテールは、しばしば弾劾され、あるいは誤解されたような無神論者ではけっしてなかった。18世紀啓蒙思想を代表する科学的、合理主義哲学者として、迷信と狂信、聖書に基づくキリスト教教義、排他的、非寛容的、圧制的教権主義を、『カンディート（*Candide*）』（1759）や『アンジェニュ（*L'Ingénu*）』（1767）などの小説を初めとして「カラス事件（L'Affaire de Calas）」での弁護など、あらゆる形式の著作、言論、裁判などを通じて、あるいは辛辣に嘲笑、風刺し、あるいは決然として批判、糾弾したその活動全体が、文学、思想、哲学、宗教上の敵から見れば、無神論者と映ったにすぎない。

1735年に書き上げた（刊行は死後の1785年）『形而上学論（*Traité de métaphysique*）』では、本来、人間が生得的にもっている神についての普遍的、定型的観念のようなものはありえず、それは時間と空間、宗教と法とによって異なるとしている。したがって、神の存在証明は、数学や形而上学における真理と同様、理性の力を借りねばならない。すなわち、「わたしは在る、したがって、なにかが在る。もしなにかが在るとすれば、はるか昔からなにかが在ったことになる。なぜなら、現に在るものは、それ自身で在るか、他のものから授かった存在であるかのいずれかだからである。もしそれ自身で在るとすれば、それは必然的に在るのであり、常に必然的に在ったのであり、それが神である。もし他のものから授かった存在であり、その第2のものがさらに第3のものから授かった存在であるとすれば、この第3のものに存在を授けたものが必然的に神であるはずである」。

ヴォルテールはキリスト教徒でも無神論者でもなく、確信的な理神論者（déiste）あるいは有神論者（théiste）である。ヴォルテールは1740年に『ニュートンの形而上学（*Métaphysique de Newton*）』の中で用いた「有神論（théisme）」の語を、以後意図的に使い、「理神論（déisme）」の語は1752年を最後にヴォルテールの著作から姿を消す[1]。

ニュートンの物理学における歴史的発見がヴォルテールの啓蒙思想に与えた影響はよく知られているが、神の存在証明に関しても具体的に表われている。たとえば、「ニュートンは神の存在について心から確信しており、彼はこの神という語を、無限にして全能、永遠の創造主としての存在のみならず、自分とその創造物との間に関係を打ち立てた支配者と理解していた。なぜなら、この関係なくしては、神の認識は人類を道徳も美徳もない状態におく不毛な観念にすぎないからである」[2]。「神は、天空の星を移動させると同時に木から果実を落とすこの万有引力の法則を望んだ。その結果、ニュートン物理学は『永遠なる幾何学者（I' éternel Géomètre）』を明らかにすることにより、世界の秩序に関する議論を新たに引き起こしたのである。……この巨大な存在と微小な人間との間に考えられる唯一の交流は『崇める（adorer）』ことだけである。つまり、祈るのではなく、敬服とともに屈従の行為によって無限なる偉大者を認識するのである。かくして、臨終の床でヴォルテールは秘書ワニェール（Wagnière）に向かって、わたしは『神を崇めながら（en adorant Dieu）死ぬ』と、最後の信仰告白を行なったのである」[3]。

ところで、理神論と有神論はどう違うのか。ディドロ（Diderot）は、『続ド・プラッド神父の弁明（*Suite de l'apologie de l'abbé de Prades*）』において、次のように論じている。「有神論者とは、神の存在、道徳上の善と悪との実在、霊魂の不滅性、来るべき罰と贖罪についてはすでに納得しているのものの、啓示を認め

るために、だれかがそれを証明してくれるのを待っている者のことであり、彼は啓示を肯定も否定もしない。それに対して、理神論者は、神の存在と道徳上の善と悪の実在についてのみ有神論者と一致しているが、啓示を否認し、霊魂の不滅性、将来の罰と贖罪を疑う」[4]。また、ポモは、「有神論者は理神論者よりも力強い信仰を告白し、神を崇めるべきであると認める」と述べている[5]。

〈注〉

（1）Jean Goldzink, *Voltaire, portraits littéraires,* Hachette Supérieur, 1994, p.62.
（2）*Métaphysique de Newton,* 1740, chap.I.
（3）Jean Pomeau,"Préface", *Dictionnaire de la Pensée de Voltaire par lui-même,* Edition Complexe, 1994, p.XV.
（4）Jean Goldzink, 前掲書、p.155.
（5）同上、p.62.

〈本文試訳〉

カリクラテス

まず、神(テオス)は存在するか、というありふれた質問から始めたい。ユピテル・アモン[1]の大祭司はアレクサンドロスを自分の息子であると宣言して、高い報酬を獲得した。しかし、そもそもこの神(テオス)は存在するのだろうか。神の話が出て以来、われわれはだまされてきたのではあるまいか。

エウヘメロス

たしかに、クレタで死んだユピテルや、リビアの砂漠に埋められていた石の牡羊を崇拝させられたとき、われわれはだまされたのだよ。ギリシア人は才気がありすぎて狂っとる。彼らは不当にも人間をだまして、「走る」という意味のギリシア語から「テオイ」、つまり走る神々[2]という語をつくったのだな。彼らの言う哲学者は、わたしに言わせれば、この世でいちばん理不尽な理屈屋でね、火星、水星、木星、土星といった惑星を不滅の神々だなどとぬかしおる。なぜなら、絶えず移動するし、自分で動くように見えるからと言うんだ。そんな理屈なら、風車だって神と呼べるだろうが。

カリクラテス

いや、アテナイやエジプトの空想物語のことを言っているのではないんだ。惑星が神であるとか、アモンの牡牛が神であるとか、アピス[3]の牡牛が神であるとか、カンビュセス[4]が神を串に刺して食べたとか、そんなことをきみにきいているわけではない。わたしはもっとまじめに、この世界をつくった神というものが存在するのかどうかを、きいているのだよ。わたしが、たぶん神が１人いると言ったら、シュラクサイではみんながばかにしたように笑ったんだ。

エウヘメロス

シュラクサイではどこに泊まっていたのかね？

カリクラテス

わたしの親友で執政官(アルコン)のヒエラクスのところだよ。エピクロスほどには神を信じない男でね。

エウヘメロス

その執政官はりっぱな宮殿をもっているんじゃないかな？

カリクラテス

豪華そのものさ。母屋はコリントス式の円柱36本で飾られていて、円柱と円柱の間に最高の巨匠たちの手になる彫像が並んでいるんだ。そして両翼には……

エウヘメロス

両翼の話は勘弁してもらおうか。りっぱな宮殿が存在するのは建築家が存在する証拠だというだけで十分

だよ。

カリクラテス

そうか、きみがなにを言いたいのか、わかったよ。きみが言わんとしていることはこうだ。宇宙の仕組み、それぞれの太陽の周りを周期的に回る地球たちがぎっしり集まった広大な宇宙空間、それぞれの太陽たちから勢いよく発せられ、すべての地球たちに命を与えるためにやってくる光、そしてついにはこの理解を絶する製作物が存在するのは、最高の知性を備えた、力強く、永遠不滅の製作者が存在する証拠だとね。生物の存在領域を広げたプラトン派のすばらしい発見を、きみはこれからわたしに示そうというのだろう。この宇宙群の中ですべての事象を互いの利益のために取り仕切る偉大な存在を、わたしに示そうというのだろう。さんざん使い古されたこういう論拠では、エピクロス派を説得できまいよ。彼らはきみに冷ややかにこう言うだろう。自然がすべてをつくったとか、そこに偉大な存在があるとか、自然を見たとか、太陽に、星に、わが地球のすべての生産物に、われわれ自身の中にそれを感じるなどとは考えないと。どんな想像上の存在か知らないが、目で見ることもできず、それに対してかすかな概念さえもいだくことができず、この自然のすべての営みをそのせいにできるような、想像上の存在を認めたがる大きな欠点があること、そして良識がほとんどないことを、彼らは否定するだろう。自然は、その持続的な働きによってわれわれにはっきり感じられ、認められるのであり、われわれの足下や頭上のいたるところにあり、われわれを産み出したものであり、われわれを生かし、死なせるものであり、明らかにわれわれが捜し求めている「神」であるのだ。参考のために次のような本を読んでみてくれたまえ。『自然の仕組み』(5)『自然の歴史』『自然の原理』(6)『自然の哲学』(7)『自然の法典』(8)『自然の法則』(9)などだ。

エウヘメロス

なら、もしわたしが、そもそも自然などというものは存在せず、世界にあるのはすべて技術であって(10)、この技術が労働者の存在を告げるといったら、どうする？

カリクラテス

なんだって！　自然などというものは存在せず、すべては技術だと？　そんな考えは空疎というほかないな。

エウヘメロス

この真理を最初に提起したのは、無名同然の、たぶん、仲間うちでもほとんど問題にされてない哲学者でね。ところが、これは無名の人間の主張にしては、なかなか真実をついているんだ(11)。きみはこの自然という曖昧な用語では、今は存在はするが、明日には大部分が存在しなくなるような物の集まりとしか理解できないと言うかもしれない。たしかに、木、石、野菜、毛虫、山羊、若い娘、猿などは、一つの絶対的な存在を構成することはとうていできない。その絶対的な存在がなんであるにせよ、だ。昨日にはまったく存在しなかった結果は恒久的な、必要な、生産的な原因とはなりえない。繰り返すが、きみの言う自然とは、物の普遍性を意味するために発明された言葉にすぎないのだよ。

今、きみが、技術がいっさいのものをつくったのだと納得するには、虫を見てみさえすればいいんだ。カタツムリでも、ハエでもいい、そこにはいかなる人間の産業も真似ることのできない無限の技術が見られるはずだ。つまり、無限に巧妙な技術者が存在しなければならないわけで、賢人たちはそれを神と呼んでいるのだ。

カリクラテス

きみの考えるその職人は、わがエピクロス派流に言えば、われわれが自然と呼ぶこの常に死滅と再生を繰り返す集合体の中で永久に活動する秘密の力ということになるな。

エウヘメロス

もはやありもしない存在の中に、また、まだ生まれてもいない存在の中に、どうして一つの力が入っていけるというんだ。どうしてその目の見えない力が、感じたり考えたりする動物を、また、たぶんまったく考えることをしない多数の太陽をつくりあげるだけの知性をもちうるというんだ。きみは、いかなる既知の真

理にも基づかないそんな理論体系は、熱に浮かされた想像力が産み出した夢物語にすぎないと思うだろう。きみの言う秘密の力が存続できるところは、知性をもつ動物をつくりだせるほどに強力かつ知的な存在の中だけだ。ある必要な存在の中だけだ、それがなけれがなに一つありえないわけだから。ある永遠の存在の中だけだ、自分だけで存在するのでは自分が存在しなかった瞬間を特定できないわけだから。ある善なる存在の中だけだ、いっさいのものの原因であって、その中にはなにものも悪を入り込ませることはできないからだ。それが、われわれストア派が神と呼ぶものだよ。弱い生き物たちが彼らの創造主の影に近づくことができるのと同様に、われわれが徳によって似るように努める偉大なる存在がそれだよ。

カリクラテス

そこがじつは、わがエピクロス派が認めないところなのだ。きみたちは彫刻家のようなもので、のみを振るって美しい彫像をつくり、それを崇めるわけだよ。きみたちはきみたちの神を鍛造して、善の尊称を与える。しかし、われわれのエトナを見てみればいいんだ(12)。数年前に戦火に呑み込まれ、今なお廃墟から硝煙の消えないカタニアの町だ。それから、プラトンがわれわれに教えてくれた、2千年以上前に破滅したアトランティク島(ママ)を。ギリシアを破壊した大洪水を。

道徳上の悪について言うなら、きみがこれまで見てきたすべてのことを思い出してみればいいんだ。それでもあえてそうしたければ、きみの言う神に善の形容語を与えればいい。こういう有名な議論があるが、答えられた者はひとりもいない。「神」が悪を阻止できなかったとしたら、この場合、彼は全能だろうか？あるいは、阻止できたのに、しなかったとしたら、どこに彼の善意があるのだろうか？

エウヘメロス

神を引き摺り下ろして無秩序に取って代わらせようとする、そういう古い理屈に、わたしは怯えっぱなしだ。この不幸な地球上でわたしが目撃したすさまじい災厄のせいで、いっそうおそろしい気がしている。しかし、わたしたちの周りに火を噴き出し、死者を積み上げるあのエトナ山の麓には美しく肥沃な畑野が広がっているではないか。10年にわたる殺戮と破壊のあと、シュラクライに平和と豊饒と歓喜と詩歌と哲学とが再生したではないか。だから、この世界には悪もたくさんあるが、善もあるのだよ。つまり、すべてが神の仕業であるとしても、神はまったくの意地悪というわけではない証拠さ。

カリクラテス

神が常に、そして全面的に残酷というわけではないというだけでは足りないね。ぜったいに、ただの一度も残酷なことはしないというのでなければだめだ。それに、神が創造したという地球は、いつもなんらかの災難に見舞われているではないか。エトナ山が休んでいる間でも他の火山が猛り狂う。アレクサンドロスがいなくなっても、他の破壊者が現われる。この地上に災難と犯罪のなかったことは一時もないんだ。

エウヘメロス

そこなんだ、わたしの言いたいことは。苦しめるために生き物をつくり出した、弱い者いじめの神とする考えは、おそろしいだけでなく、ばかげている。善を行なう神と、悪を行なう神との2種類の神がいるとするのは、もっとばかげているし、やはりおそろしい考えと言わねばならん。しかし、きみに真実が証かされると、不安な結果をもたらすからといって、その真実そのものがなくなるわけではあるまい。万物の源泉にして必要不可欠、永遠の「存在」があるとすれば、われわれが苦しむからといって、その存在がなくなるわけではあるまい。われわれがどうして苦しむのか、わたしが説明できないからといって、その存在がなくなるわけではあるまい。

カリクラテス

できるかできないかわからなくても、思い切って、きみの考えるところをわたしに説明してみてくれないか。

エウヘメロス

わたしは心配なんだ。というのは、これからきみに聞かせようとするのは、理論体系みたいなものなのだが、まだ証明されていない理論体系などはうまくできた妄想にすぎないんでね。いずれにせよ、わたしはこ

の深い闇の中でかすかな明かりを見つけたのだ。それを消してしまうか、大きく広げるかは、きみしだいだよ。

まず気がつくのは、わたしは、本来単独で存在しており、永遠にして知的にすぐれ、善にして力強い、ある必要不可欠な存在があるとの考えに達してはじめて、神の概念をつかむことができたということだ。こういう特徴は、神には欠かせないものと思うが、そのために神が不可能事をなしえたのではない。神がなんとかしたからといって、三角形の３つの角の和は２直角に等しいことが変わるわけではない。神といえども、２つの矛盾命題を一致させることはできない。悪が世界に入り込むのは、おそらく矛盾していたのだろう。思うに、大地を掃き清め海を澱ませぬようにするのに必要な風が嵐を起こさないようにすることは不可能だったのだ。鉱物や植物を形成するために地球の表層に燃え広がる火は、またその大地を揺さぶり、都市を破壊し、住民を圧死させ、山をあるいは崩しあるいは築く定めだった。

すべての動物がいつでも生き、かついつでも産み殖やすというのは矛盾することだった。世界はすべての動物を養うことはできないからだ。したがって、悪の最たるものと見なされている死は、生と同様に必要なものだった。すべての動物の生殖器官の中に欲望が燃えさかることが必要だった。動物は満足することを望まずに満足感を求めることはできないからだ。この欲望は猛々しくなければならなかった。喧嘩や戦争、殺戮、不正や掠奪行為を産み出す強烈な情念を煽るくらいでなければ、活発にはなりえなかった。こういうしだいで、神は、自らが存在できる条件の下でしか世界を形成することができなかったのだよ。

カリクラテス

ということは、きみの言う神は全能ではないわけか。

エウヘメロス

神はまちがいなく、唯一の能力者だよ。いっさいをつくったのが神だからな。だが、途方もない能力の持ち主というわけではないんだ。ある建築家が50ピエ[13]の大理石製の家を建てたからといって、ジャムでつくった50リュー[14]の家をつくれることにはならない。人はだれでもその性質において限界がある。あえて言うなら、至高の存在もその性質において限界があると思う。この世界の建築家は、われわれの心の目に見え、同時に把えがたいものであっても、われわれの畑のキャベツの中に住んでいるわけでもなければ、カピトリウム[15]の小さな神殿に住んでいるわけでもない。神はどこに住んでいるのだろうか。神はどこの空から、どこの太陽から、すべての自然に向けてその永遠の意志を送り出しているのだろうか。それについては、わたしはなに一つ知らない。しかし、自然全体が神の意に従っていることを、わたしは知っている。

カリクラテス

しかし、もし万物が神の意に従っているとしたら、きみは、いつ彼がこの自然全体に最初の法則を与えたと思うのか。いつ彼は、この無数の太陽たちを、惑星たちを、彗星たちを、この弱々しく不幸な地球をつくったと。

エウヘメロス

きみは、疑わしい答えしか出せないような質問ばかりするんだな。あえて憶測するとすれば、至高の存在、創造者であり、保存者であり、破壊者であり、再生者である、この永遠の存在の本質は影響を及ぼすことにあるから、常に影響を及ぼさずにはいられないのだ。永遠のデミウルゴス[16]の作品は必然的に永遠なんだよ、太陽が存在して以来、その光が直線的に宇宙空間を貫いているようにな。

カリクラテス

きみは比較によって答えているんだ。だから、いまわれわれが話している事柄を、きみはそれほどはっきりとは見ていないのではないかって、疑いたくなる。きみはそれをなんとかして明らかにしようと努めてはいる。それで、いくら苦労したところで、結局は心ならずも、いっさいを必然性というある神秘的な力のせいにする、わがエピクロス派の学説に戻るのがおちなんだ。その神秘的な力のことを、きみは神と呼んでいるだけのことだよ。エピクロス派はこれを自然と呼ぶんだ。

エウヘメロス

真のエピクロス派となら、いくつか考えが共通していたとしても、腹は立たないさ。誠実で、きわめて賢明で、尊敬に値する人たちだからね。しかし、神々のことを、酒とご馳走と色事でぼけちまった、役立たずの老いぼれ放蕩者呼ばわりして、ただばかにするだけのためにその存在を認めるような連中とは、いっさい共通点はないんだ。

幸福は徳のうちにのみありとするが、自然の秘密の力しか認めようとしない、善良なエピクロス派については、彼らがその秘密の力は永遠にして力強く、知的な、ある必要不可欠な存在の力であることを認めるなら、わたしと同じ意見だと言える。人間と呼ばれる、理性を働かせる存在は、神と呼ばれる、きわめて知的な支配者の作品にすぎないからだ。

カリクラテス

彼らにきみの考えを伝えておくよ。きみのことを仲間と見てくれることを祈ろう。

〈注〉

（1）ユピテル（＝ゼウス）はシンクレティズムにより東洋のさまざまな神々（いずれも最高神）と結びつけて考えられたので、これはエジプトのアモン・ラー（Amon-Rā）――ギリシア語表記でAmmon――とみることができる。いずれにしても、ここでは最高神という意味であろう。

（2）惑星のこと。Notes du Second Dialogue,CE,p.31.

（3）エジプトの月の牡牛神。

（4）古代ペルシアの王（前529－522）。

（5）ミラボー（Mirabeau）の著作とされるが、実際にはオルバック男爵の作である。オルバック男爵は本書「第4の対話」中にディオゴラス（Diogoras）の名で出てくる。Notes du Second Dialogue,CE, p.31.

（6）正確には『古代哲学者の意見に基づく自然の原理（*Principes de la nature, suivant les opinions des anciens philosophes*）』1725年。著者フランソワ＝マリー＝ポンペ・コロンヌ（François-Marie-Pompée Colonne）は1726年3月6日にパリで自宅の火災のため焼死した。同上。

（7）著者はドリール・ド・サール（Delisle de Sales）。同上。

（8）正しくは『自然法典あるいはその法則の精神（*Le Code de la nature,ou le vêritable esprit de ses lois*）』1755年で、著者はディドロ（Diderot）とされているが、これはほかにもいくつか著書のあるド・モレリ・ル・フィス（de Morelli le fils）である。同上。

（9）ヴォルテールは1777年に『正義と人間性との値段（政治と法）（*Prix de la justice et de l'humanité (Politique et Lêgislation)*）』と題する著書の11項において自然に関する諸著作の検討を行なった。同上。

（10）ヴォルテールの「自然」に関する考え方を示す例として、『百科全書に関する疑問（*Questions sur l'Encyclopêdie*）』1771の「自然（Nature）」の項目中に収められた、次のような「哲学者と自然との対話（Dialogue entre le philosophe et la nature）」がある。同上。

哲学者

自然よ、あなたはどなたなのですか？　わたしには見えますが、あなたの中に（……）あなたはいつも活動しているのですか？　いつも受け身ですか？　あなたの中にある諸々の要素は自発的にそこに身をおいているのですか、砂の上に水が置かれ、水の上に油があり、油の上に空気があるように？　あなたはいっさいの行動を指揮する頭脳をもっているのですか、公会議の議員たちがどんなに無知蒙昧でも、招集されるとたちまち結構な着想を打ち出すように？　どうか、あなたの謎を解く答えを教えてください。

自　然

わたくしは万物です。それ以上なにも知りません。わたくしは数学者ではありません。わたくしの中

ではすべてのものが数学の法則に従って配置されています。もしそなたにできるなら、それがどのようにして行なわれたかを当ててみてください。

哲学者

たしかに、あなたの万物は数学を知らず、あなたの法則はもっとも深遠な幾何学ですから、あなたを指導する永遠なる幾何学者が、あなたの行動を支配する最高の知性が存在しなければなりません。

自　然

いかにもそのとおり。わたくしは水、土、火、空気、金属、無機物、石、植物、動物です。わたくしの中に知性が存在することをはっきりと感じます。そなたも知性をもっていますが、そなたには見えないのです。わたくしもわたくしの知性が見えませんが、その目に見えない力を感じます。ただ、それがなんであるのかを知ることはできないのです。ですから、わたくし自身の小さな一部にすぎないそなたが、なぜ、わたくしが知らないことを知りたがるのでしょう？

(……)

あわれなわが子よ、わたくしに真実を語ってほしいのですか？　じつは、わたくしはわたくしに似合わない名をつけられたのです。わたくしは自然と呼ばれています。しかも、わたくしはすべての技術なのです。

哲学者

その言葉でわたしの思想全体が大混乱してしまいます。なんですと、自然は技術にすぎないとおっしゃるのですか？

自　然

ええ、たぶん。そなたがずいぶん粗雑なものだと思っているこれらの海や山に無限の技術が存在することを、知らないのですか？　これらの海水はことごとく地球の中心に向かって引っ張られていて、上昇するのは不変の法則によるほかないことを知らないのですか？　地表を覆う山々は万年雪の巨大な受け皿で、絶えず湖沼や河川をつくり出し、それらがなければわたくしの動物種も、わたくしの植物種も死滅してしまうことを、知らないのですか？　それから、わたくしの動物界、植物界、鉱物界と呼ばれるものについては、そなたにここで見えるのはこの3つだけですが、わたくしは何百万ももっているということを覚えておいてください。しかし、昆虫と小麦の穂と金と皮がどのようにしてつくられたのか、それだけを考えるなら、すべてが技術の驚異だと、そなたには思われるにちがいありません。

(……)

哲学者

わが愛する母よ、少しばかり教えてください、なぜあなたは存在するのか、なぜ、なにかが存在するのか。

自　然

何百年も前からその根本原理についてわたくしに質問するすべての人々に答えることを、そなたにもお答えしましょう。「それについてはわたくしはなにも知らない」と。

哲学者

繰り返し壊滅されるためにつくられたこの無数の存在物、他を食い、他に食われるために生まれ、子を産むこの大群の動物たち、さんざんに苦痛を味わうためにつくられた感受性をもつこの大群の人間たち、また、理をほとんど解さない大群の知識人たち。そういうものよりも、無のほうがましとおっしゃるのですか？　自然よ、これらはいったいなんの役に立つのでしょうか？

自　然

そんなことは、わたくしをつくった者にきいてみてください。

(11) ここではヴォルテール自身のことを言っている。Notes du Second Dialogue 8,CE,p.31.

(12) この名称は紀元前467年にこの地で死亡したシュラクサイの僭主ヒエロン１世（Hieron ler）がシチリアの都市カタニアに与えたもの。
(13) 長さの旧単位、約30センチ。
(14) 同上、約４キロ。
(15) ローマ七丘の一つで、ユピテルを祀った神殿があった古代ローマの心臓部。
(16) プラトン哲学で世界の形成者、建築者としての神、造物神。